山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第17号（2004. 3）

# 大韓帝国における愛国唱歌教育運動とキリスト教主義学校
## —開化と排日を手がかりとして—

朴　成　泰

Educational Movement for Patriotic School Songs and Christian Schools in Korea
— With Civilization and anti – Japanese Nationalism as a clue —

PARK Sungtai
(Received December 17, 2003)

キーワード：唱歌教育、キリスト教、教育政策

## はじめに

韓国は長い間、[1] 鎖国政治を貫徹したが、日本の全権大使黒田清隆と韓国代表の申憲がソウルの入口に位置する江華島で調印した江華島条約（1876年２月27日）は、韓国の強制開国を導くことになるが、結果として韓国の近代化への道程を歩ませたと言える。

「隠者の国」と呼ばれた韓国の開国は、日本をはじめ、欧米の列強が政治、外交、経済などの勢力を拡張する舞台となる。いち早く入国した分野はキリスト教宣教師であり、韓国はこれらの宣教師の活動を通して、西洋文明に初めて接することになる。この時代の変遷は物質文明だけからみると、いきなり近世から近代への突入を余儀なく受け入れることになる。

韓国における学校教育は、寺子屋に準ずる書堂が存在したが、その教育内容は漢字、中国古典などを中心に科挙試験を目指すことが教育目標であった。このような書堂教育を受けた者の中では開国以来、欧米や日本で近代的教育や科学技術などを学んで、韓国近代化に大きく貢献した者もいる。

同時に、欧米宣教師は豊富な経験と資金を駆使し、韓国を最終的にキリスト教国家として変貌させるため、組織的な布教活動を展開した。とりわけ米国宣教師は、布教事業、医療事業、教育事業を組織的に推進した結果、多大な成果を上げ、その実績は「世界宣教史の奇蹟」と称された。

近代韓国における学校教育は大きく分類すれば、第一に、韓国民衆が近代教育を目指して設立した民族学校、第二に、日本が親日教育を目的として設置した官公立学校、第三に、キリスト教宣教師が布教事業を最優先したキリスト教主義学校の設立である。これらの学校は事実上、韓国が日本の植民地化になる第二次日韓協約（1905年）以後、それぞれ排日教育、親日教育の色彩をもつ学校教育を行った。

本稿では、唱歌教育活動を最も活発に展開したキリスト教主義学校と民族学校との関わりを分析すると共に、文化的抵抗である愛国唱歌教育運動は、統監府及び宣教師の確執を背景に、どのように対抗してきたかを考究したい。

## 1　日本における対韓音楽教育政策

日本が韓国の近代音楽教育に何らかの関わりをもつことは、韓国人の李銀突が日本留学したことから考えられる。その最初の報道は「今渡来航ノ韓人李銀突氏ハ教導団へ通学して歩兵科の喇叭を修行したき旨陸軍省へ願ひ出て許可を得られたり」[2)]と伝えたように、李銀突自身が日本留学を志願したと伝えている。翌年1月には「朝鮮人李銀突氏は是まで日々一人特別に喇叭の教授を受居たるば当今に至ては其枝大に上達したれば教導団生徒と同時間に稽古するを丶なりたり」[3)]と報じられ、李銀突の音楽留学生活が順調であることがわかる。また、同年9月には「陸軍教導団の喇叭教員梅澤有久氏は此程病死につき一昨日祭粂料として同省より金五十円を賜せらるまた同団へ志願にて歩兵喇叭を通学せし朝鮮人季銀突は付き證状を授与せられたれば帰国したり」[4)]と報じ、李銀突の日本留学を短編的ながらも、動向を知らせている。しかし、李銀突の帰国後の活動などは全く伝えられていない。彼の日本留学は、日本陸軍省軍楽隊の留学生であり、正規期間を修学して卒業しており、日韓両国における合意を得た留学である。さらに、単なる韓国留学生の動向を当時の有力新聞『東京日日新聞』に詳しく報道することは、この時期から日本の対韓音楽教育政策が試みられたと考えられる。

韓国においても、音楽活動として「去る天長節の夜朝鮮京城領事館に宴会を開きし折日本語学校の生徒なる朝鮮の少年十数名は教師長島厳次郎氏に伴はれ其席上に起て一斉に『君が代』の一曲を唱へしかは満場の喝采破る丶ばかりなり」[5)]と官立日語学校の生徒らが日本人教師に誘われ、《君が代》を歌わせられ、大好評を得たと報じているが、天長節行事を名目に《君が代》が歌えるという前例と歓迎をもたらしている。

日本国内においても、韓国に対する音楽のあり方が問われ、様々な意見が叫ばれた。それらの中では、軍歌の普及を訴える勢力が台頭して「元寇の役、朝鮮征伐等、勇壮活発の軍歌を唱へしめよとは、千葉教育雑誌の希望なり。然り鳥居枕、佐藤誠実、中村秋香の諸先生は、此際殊に一片の軍歌を作り、是を我国マルセーユの歌として歌はしめよ、新聞の広告に、佐々木信綱氏の軍歌出版せられたりと見たり。未だ其書を見ずと雖も、能く時機を見るの明あるものと云ふべし。音楽学校の義務は、誠に茲に在りと云ふべし」[6)]と示し、唱歌教育は元寇の役、韓国征伐などを取り上げながら、軍歌を求めているが、千葉教育界は唱歌教育のみではなく、東京音楽学校にも軍歌教育を求める事態である。

このような対韓唱歌教育政策は当時、韓国留学生を最も多く受け入れた慶応義塾が「三田の慶応義塾には朝鮮国より留学の撰抜学生其数も今は殆んど三百名日夜勤学怠らず猶此頃は同塾の教師南部利久氏が楽器に合して日本語の唱歌軍歌を一同に教へられしに善く覚え得意に独唱さへするに至れり」[7)]と報じていた時に、同塾の教師が日本唱歌や日本軍歌の移入に成果を上げている。

音楽教育を通した日韓交流が行われる間に、ドイツ人音楽家エッケルト（A. F. Eckert）が来韓し、韓国音楽界に新たな方向を導くことになり、文部省視学官野尻精一は「音楽なども進歩が宜いやうである、独乙人でエワケルトと云ふ人が宮内の楽師となりて西洋音楽を教へて居るが其成績は中々良いやうである」[8)]と韓国の音楽教育がエッケルトによって軌道に乗りつつあることを伝えている。これはエッケルトの優れた指導法の結果である。

エッケルトは本来、日本政府のお雇い軍楽指導者として招かれ、日本軍楽隊の水準を飛躍させた実績を持つ者である。ことに彼は、韓国軍楽隊を日本軍楽隊と比べられる水準ま

で伸ばし、韓国近代音楽教育史に重要な位置を占めている。彼は韓国を限りなく愛し、韓国で生涯を閉じている。エッケルトの生涯をみる限り、日本が政治的、軍事的、文化的に優位に立っていたとはいえ、韓国に対する植民地音楽教育政策は、容易ではなかったと推察できる。このことからキリスト教会、軍楽隊などから洋楽を受容した韓国の音楽教育界は、愛国唱歌教育運動に文明開化、排日思想などの思潮だけではなく、音楽そのものの向上を図ったと考えられる。

一方、韓国人の音楽才能を示す出来事としては、「重鶴橋付近で少年らが兵隊ごっこをしているが、喇叭と戦術が常識を超える水準に達している。軍部（国防省）から少年らを呼び出し、演奏能力を試してみたら、軍楽隊員に勝る能力を有していた。軍部は特に優秀な４名を軍楽隊員として任じた」[9] と報じたことをみると、洋楽導入以前から韓国人に音楽才能があり、音楽芸術や音楽教育が可能であることを物語っている。

日露戦争で勝利を収めた日本は、第二次日韓協約（1905年）の調印によって、韓国の主権を手に入れると、政治、経済、産業、教育などを掌握する。とりわけ教育については「普通学校令」（1906年８月27日）を公布し、「教科及編制」に「普通学校ノ教科目ハ修身、国語及漢文、日語、算術、地理歴史、理科、図画、体操トシ女子ハ手芸ヲ加ス　時宜ニ依リ唱歌、手工、農業、商業中ノ科目或幾科目ヲ加フルニトテ得」と定められ、唱歌も教科に加えられたが、選択教科に止まっていることがわかる。

「普通学校令」における唱歌の教科目標は「唱歌ハ平易スル歌曲ヲ唱フコトヲ得シメ兼シ美感ヲ養ヒ徳性ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス唱歌ハ単音唱歌ヲ教授ケ歌詞楽譜ハ平易雅正シテ学徒ノ心情ヲ快活純美テラシムルモノタルヘシ」と定められ、唱歌科の理念は「徳性ノ涵養」を打ち出している。

日本の音楽教育は、唱歌教育から始まり、その教育理念は「徳性ノ涵養」である。これについて筒石賢昭氏は「古代中国の大思想家孔子（B.C.552～479）が、『礼記（らいき）』の「楽記」に音楽に関係する考えや理想を述べている」と示し、彼は「楽記」の内容として音楽とは何か、人間の心や感情と音楽の関係、個人と音楽の関係、国家と音楽の関係、音が接するときの考え方・態度、音楽と礼節、曲調と人間の心、楽曲解釈、歌のジャンルを選択する際の観点の８点を取り上げている。また「有名な『論語』では、『詩に興り、礼に立ち、楽になる』と述べ、教育の過程を詩（詩経）より興り、礼（典礼）」を経て、最後に音楽に至るとしている。『楽記』においては、音楽を『楽』と『音』に分け、『楽』は雅楽であり、徳性を司る『徳音』であり美・善を尽くした音楽であるととらえた。一方『音』は非常に感覚的なものであり、「溺音」であって、人間を墜落させる『俗楽』であるとした。このような音楽の思想は、儒学の一部として日本人の音楽教育観に早くから影響を及ぼした。音楽教育観に関しては、明治以来の唱歌教育の目標「徳性の涵養」が例としてあげられる」[10] と説明しており、日本の唱歌教育理念が明治時代から終戦まで貫いた「徳性の涵養」は、音楽そのものより、道徳的性格をもつ理念が優先され、音楽そのものの美的価値が積極的に追求されたとはいえない。

当時の音楽教育がどのように位置づけられていたかは興味深い。それを短編的に示すことが学部の教員採用試験検定広告（1907年）を分析すると、一定の実態が見える。すなわち、「本部より３月4日に教員採用試験を行う。各学校の卒業者や同等の学力がある者は受けられる。採用試験は1907年２月28日まで願書及び履歴書を提出し、当日10時に学部で試験が行われる。試験科目は、必須科−修身、教育、国語、漢文、歴史、地理、数学、理

科であり、随意科−日語、図画、音楽、体操、手工、農業、商業である。必須科は全科を受験し、随意科は必須科他の１教科、あるいは数科を受験しなければならない。さらに専科教員及び副教員は、漢文、図画、音楽、体操、手工、農業、商業が課されており、専科は１科目、あるいは数科を受験しなければならない」[11] と告示している。

教員採用試験の内容を分析すると、いずれも開校したばかりの官立や公立学校、すなわち、学部管轄の卒業生は皆無であるという事情から、欧米宣教師らが経営するキリスト教主義学校の生徒、卒業生が受験者対象であることがよく分かる。学部はなぜキリスト教主義学校卒業生などが教員になる道を開いているか。その事情は明らかにされていないが、恐らく教員絶対不足事態を乗り越えるため、とりあえずキリスト教主義学校卒業生でも採用し、彼らを対韓教育に協力するよう何らかの動機を与えたと推察される。

キリスト教主義学校卒業生を教員に採用する反面、学部次官俵孫一は、愛国唱歌教育運動が怒涛のように展開されると、その取り締りを全国規模として着手したが、期待した成果は上げられなかった。この事態を深刻に受け止めた俵は、抜本的対策を訴えた。その内容は「学部次官俵孫一氏が各公立学校へ通告し、学校教育に参考するために、地方各地で流行する諺と童謡などを査察する必要がある。各学校は綿密に調査分析し、９月15日まで報告しなければならない。その内容は、一、現在に流行するもの及びその地方、一、現在に流行しないが、以前に流行したもの（流行の期間が明らかなものは、その期間も記載する)、及びその地方」[12] とした。俵の取り締りは、公立学校も対象になり、私立学校はいうまでもなく、韓国全土の学校に愛国唱歌教育運動が拡散していたことを物語っている。

学部は、社会の音楽活動が愛国唱歌教育運動を支えている点に警戒を強めるが、それより重要な課題は、韓国政府軍楽隊の処理問題が浮上する。日本による近代学校の普及は、文明国日本として唱歌教育は一つのシンボルであり、官立漢城師範学校に音楽科目を課することも、その政策が反映されたものである。しかし、音楽教師の不在は軍部所属の軍楽隊員８名を音楽教師として採用することになり、[13] それは、結果として軍楽隊の解体過程となった。

第２回官公立普通学校教監会議（1908年７月）においては、協議事項報告に「必要タル図書器械ヲ調査スル件」が取り上げられ、唱歌教育に関連する内容として「12. 普通ノ玩具 ［中略］ 14. オルガン 15. 蓄音器」[14] を求めている。当時の唱歌教育の実態は、官公立普通学校の中で23校がオルガン不備の状態をみると、蓄音器などの設備要求は想像を超える要求である。

このように、第二次日韓協約後、日本は韓国教育を掌握し、近代教育の一つとして唱歌教育を普及した。その内容には人的交流、唱歌教育、音響機器などが移入された。これらは、文明開化が生み出した新しい時代のシンボルであると同時に、日本の天皇制教育などの移入が胎動していた。韓国に対する唱歌教育の第一歩は、日本にとって新しい歴史を創出する時代であり、韓国においては愛国唱歌教育運動の生成過程として文明開化、自主独立、排日思想などの民族的課題が内在する時期を迎えていた。

## 2　韓国の開化と民族学校の愛国唱歌教育運動

朝鮮は一王朝として518年（1392〜1910年）も続けられ、世界史における最も長かった王朝である。朝鮮王朝は開国後、まもなく中国の属国へと転落し、毎年貢ぎ物をする立場になっていた。さらに、朝鮮末期は、国王高宗の父親である興善大院君（1820〜1898年）

が執政し、徹底した鎖国政治を貫き、朝鮮近代化への機会を失い、国力は著しく衰退していた。

朝鮮末期に入ると、貴族階層である両班から一部の有志が台頭し、鎖国政治の打破を叫びながら、韓国近代化を主張した。政治家兪吉濬（1856～1914年）は、その一人として開化運動に尽力した代表的人物である。[15] 渡部学氏が兪吉濬の開化思想について「彼は、開化を単に技術的物質文明の観点からだけでとらえているのでなく、社会科学的かつ人間的にとらえているのである。彼によると、一国の開化は単なる物質文明の輸入によってのみなしうるものではなく、他国の長所を尊重するとともに自国の美点を守り、日に新たに絶えざる努力をつみ重ねていくところにこそ達成されるものである。要するに彼は、自覚的自主的な開化—それによって独立自存も可能になる—を考えていたのである」[16] と分析したように、韓国の開化は先駆者による主体的意識から唱えられたと言える。

日本による強制開国と文明開化によって、韓国自身による時代認識、自国自覚の動きが現れ始め、「韓国人が目を覚めれば、社会は進歩、公平、正直になる。富国強兵に導かれる学問と思想に努めれば、韓国人も英国や米国に及ばないとは言えない。韓国も清国を潰し、遼東と満州を占領し、賠償金８億円を支払わせることができる。望むらくは、韓国人は大望をもち10年後は遼東と満州を占領すると共に、日本の対馬を取り戻す覚悟が求められる」[17] とかなり好戦的姿勢をみせ、日本との対決も鮮明に表している。しかし、当時の民衆は、半世紀に及ぶ中国支配の間に自主、自立、自力の精神が希薄となり、国家独立に関する民族的意識も薄れた。しかし、「韓国人も人間なら、自主独立を喜んで官民が力を合わせ、国家の富強に尽くすべきである。万事を先進国から見習い、肩を並べるよう努力することが愛国精神である。しかし、民衆は、自主独立が嬉しいことか、悲しいことかも分別できない。また、外国人と対等立場で接近する意識もない。韓国人は恥知らない民族に見られる」[18] と自主独立、民族覚醒を呼び掛けると共に、民度を高めようとする意図が読み取れる。

さらに、民衆啓蒙を重要な目的にして『独立新聞』に寄稿した鄭キトクは「どうしたら、韓国も世界の開明国家と同等の立場となり、韓国国旗を世界に掲げられるか。哀れな民衆は、心を合わせて自主開明し、国王の安泰と独立の基礎を築くべきである。国を守り、民衆に平和が戻れば、文明社会の法律を定めよう。軍事力を増強して外国からの侵略を阻止しよう。衛生機関を各地方に設け、病気に脅かされる民衆の生命を救おう。ところが、このような開明社会の建設は念頭に置かないで、甲党や乙党ばかり分別して党争で日が暮れる。法律は効力を見出さないまま、民衆が民衆を処罰している。地方官吏は政府をごまかし、民衆に搾取行為をするばかりでは、開明法律とは言えない。官僚らは日本党、ロシア党、英国党、米国党に入り、政界の有力者となる。勤勉な官僚は停職、休職、免職させるが、自分の家族、親戚、食客、妾だけは常時に雇う。しかし、彼らはその職務をやりこなせないため、度支部（財務省）顧問官ブラウン氏は、給料を支払えないと通知したら、激しく抵抗したという。民衆はいつも協力して国王を助け上げよう。私たちが一致団結すれば、開明進歩と自主独立は間違いない。忠心があれば、国家の危機は命をかけて救うはずである」[19] と韓国の文明開化と自主独立を懇切に求めている。

1897年になると、国王が日本の政治的干渉に耐えられず、俄館播遷という前代未聞の事態を経て、[20] 翌年に国号を大韓帝国と改名するなど、国政を刷新しようとする動きが見られた。同年、「韓国開国505年紀元節を迎え、独立館で記念式が行われ、国旗を高く掲げて

花束も飾った。政府官僚、生徒、民衆が大勢に集まり、諸国の領事をはじめ、関係者も参列した。式事順序は、第一に、培材学堂生徒が《祝寿歌》を斉唱として『五百年の我が王室万歳　いつもお守り・・・』と歌えば、外国人夫人が楽器伴奏に合わせて斉唱した。第二に、会長安駉寿（？～1900年）氏が開化の意義を演説すると、第三に、漢城判尹（首都、漢城府知事）の李采淵が学部大臣李完用（1858～1926年）の『国民の職務』を代読した。第四に、培材学堂生徒が《無窮花》を『我が国王は黄泉が助ける　国王と民衆は一つである　嬉しくて万々歳　太平独立しよう』と歌うと、外国人夫人らが器楽伴奏を加えて合唱した。第五に、米国宣教師アッペンゼラー（H.G.Appenzeller）が英語で韓国在住の外国人に対し、『各自の職務』を演説した。第六に、医師徐載弼（1866～1951年）が韓国官民に対して進歩を主題として述べた。第七に、培材学堂の生徒らが愛国唱歌を斉唱すると、再び外国人夫人が器楽伴奏した。第八に、前次官尹致昊（1865～1945年）は紀元節の問題を演説した」[21] と紀元節記念式が盛大に行われた。この記念式では民族学校というより、キリスト教主義学校が愛国唱歌と讃美歌を主導していたことがわかる。それは本来、前者は音楽活動が後者より少なかった部分もあり、このような記念式は両者が参加するから、どちら側が主導しても大韓帝国の記念式であるため、その意味が異なるものではない。

国王誕生日９月18日、聖節慶祝宴は「一昨日、独立協会で万寿聖節の慶祝宴が開かれ、本会会員と各学校生徒らが独立館に集まった。生徒は各自に花を頭に飾り、整斉に着席後、会長尹致昊氏が慶祝する理由を述べた。その後、生徒らは次第に起立して慶祝歌を絲竹に登り合唱と共に、国王のための万歳を三回し、皇太子のための千歳を三回し、大韓二千万同胞のための千歳を三回した。そして独立基礎のための億万歳を三回した後、茶菓を進めて仲良く会合した。その後、再び万々歳し、午後四時に解散した。私たちの感じたことは、頭に付けた花も宜しいが、その中には咲かされてないものも沢山ある。それは小学校学徒である。その花は、まだ咲いていないけど、将来にとても美しい花を咲かせるだろう。その花が華やかに咲くと、韓国の三千里国土は花畑になり、この上ない美しさを見せるだろう」[22] と韓国の未来は生徒と学校教育しかないと唱えている。

韓国における運動会は記録上1897年４月27日、初めて漢城府訓練場で行われ、生徒、教員をはじめ、観客は約１千名が集まる特別行事であった。その運動会の内容は「学部大臣閔鍾默氏、漢城府尹李采淵氏、日本人学校教員、独立新聞社長などが楼閣で運動会を参観している。生徒たちは、走り、体操、そして愛国唱歌を斉唱し、観衆は楽しく観覧した。学部大臣は生徒を呼び集め、熱心に勉学しながら、運動もできることは、国家に大いに役立つことと称えた。独立新聞社長の演説では、大体、何事をしても理由がある。今日は生徒たちが運動会をしている。運動場は国旗で飾られており、それをみると、韓国民族も国旗はどういうものか、国旗はいかに大切なものか、を知覚するはずである。国旗とは上には国王であり、下には民衆である。したがって、国旗は国を象徴するものであり、運動会を開く際に、国旗を掲げることは、韓国も世界に自主独立したことを見せる意味がある」[23] と運動会を通して、愛国唱歌教育運動に欠かせない国旗、民族、そして自主独立の重要性を力説している。

愛国唱歌教育運動が新しい文化活動として生成過程を見せるなか、貴族社会両班の中では、日本の韓国占有に対する排日思想、民族精神をもつ者もあれば、この時局とは全く関係なしに風流を楽しむ者もあった。法部（法務省）は「城内で女と飲酒だけではなく、太鼓を叩きながら、高らかに歌を歌ったり、町で男女が抱き合い騒ぐ者は厳罰に処する」[24]

と公布し、風紀紊乱を取り締ると告示した。このような動向は、愛国唱歌教育運動を普及することのみならず、社会浄化にも当たるが、音楽教育の側面からみると、愛国唱歌教育運動の内容と質を高めるものである。

日露戦争で勝利を収めた日本が第二次日韓協約後、韓国を占有すると、愛国唱歌教育運動は絶頂に達する。愛国唱歌は学校を中心に歌われたが、教育の領域も含め、社会でも広く普及される事態になる。その中で「近日、城内で新たな童謡が歌われるが、その内容は史略を読もうとしたら、統監が帰国すれば、奪われた外交権が韓国に戻される」[25] という政治色彩を帯びた愛国唱歌も現れた。また、「昨日、伊藤統監が日本から出発した。町の子どもたちは唱歌を歌いながら、近日、統監が帰国するなら、史略が読まれる」[26] と予言を含めた愛国唱歌が歌われ、愛国唱歌教育運動は学校教育を超えて社会運動の機能も見せ初めている。

このような社会運動は国民道徳の性格を強めて「一昨日、頌春客の何人が東大門の塔洞を訪れたが、芸者らの姿もみえた。普成学校長金重煥氏が本校の生徒と賛文学校の生徒を引率した。春季運動会の準備でようやく到着したが、遊覧客が派手に遊ぶことを目撃した。生徒らは、外国の侵略で国運の前途が見えない時期に、派手な遊びは穏当ではないと論じた。そして生徒80～90名は《愛国歌》を高唱すると、彼らは恥ずかしくて逃げるように帰宅した」[27] と報じられている。

韓国近代化は、開国直後から開化のあり方が問われ、先覚者の兪吉濬は開化を物質だけではなく思想にも求めると共に、現実課題として文明社会、自主独立、そして強力な軍事力を欠かせない条件と考えていた。このような開化のあり方が問われる中で、愛国唱歌教育運動は、その時代の影響を受け、外国人宣教師からも洋楽を受容した。とりわけ女性宣教師による器楽普及は、民謡や愛国唱歌とは異なる音楽領域として韓国近代音楽教育史に新たな地平を広げ始めたと言える。そして愛国唱歌教育運動は、単なる愛国唱歌だけではなく、儀式唱歌《祝寿歌》など儀式唱歌も加えられている。特記すべきことは、運動会などで愛国唱歌の斉唱前に、大韓帝国の国旗が掲げられていることである。これは、愛国唱歌教育運動の深層をより深める過程として受け止められる。

もう一つ注目すべきことは、民族学校の運動会をみる限り、来賓は民族学校の有志だけではなく、米国人宣教師の洋楽演奏、日本人学校教員も参列したことを鑑みれば、少なくとも日清戦争前後の時期では、必ずしも民族、キリスト教、日本の学校として分類できず、錯綜した傾向が見られるということである。したがって、この時期の領域分類は、より緩やかな枠組みから鳥瞰する必要があると思われる。

## 3　キリスト教主義学校の愛国唱歌教育運動

韓国におけるキリスト教は本来、伝統宗教である仏教や儒教とは対立概念である。キリスト教が韓国社会に台頭したきっかけは、日露戦争の結果が大韓帝国の滅亡をもたらし、その悲しみと苦しみを癒す場所がキリスト教会、あるいはキリスト教主義学校であったことによる。

取り合えず、英国女流旅行家イザベラ・バード（Isabella L.Bird 1831～1904年）の報告によると、日清戦争の際、布教事業と社会動向を「キリスト教伝道団は平壌でははかばかしい成果を得ていなかった。平壌はきわめてゆたかできわめて不道徳な都市だった。宣教師が追いだされたことは一度ではきかず、キリスト教はかなりな敵意をもって排斥され

ている。［中略］メソジスト派伝道団は活動を一時中断し、長老派は六年かけて二八名の改宗者を数えるのみだった。それから日清戦争が起きて平壌は破壊を受け、住民は流出、商業は壊滅、六万とも七万ともいわれた人口が一万五〇〇〇に減り、わずかなキリスト教徒も逃げだしてしまった」[28]と伝えている。当時の布教事業は日清戦争という変革を通して、信仰から安慰を求めるより、キリスト教に帰依したことはいうまでもなく、大切にした教徒さえも戦乱から逃走し、信仰による霊魂の自由を求めることは考えられない時期であった。

韓国人の信仰意識の低調に失望したイザベラ・バードは、「宣教師によれば、鬼神信仰をやめ、まことの神を畏れて生きるようになった人々大半は、それぞれご利益がありそうだからキリスト教に惹かれたというのであるから！［中略］『正義を求める者』があちこちいるのは疑いないとしても、極東でいう『切に求める』者とは金銭を切に求める者で、『社会不安』とは東洋では貧困と同義語にすぎず、まだまだ超俗的な関心が喚起されねばならない」[29]と民衆は、信仰に対する真剣な姿勢は見当たらず、宗教を利用した金銭意識が先行する事態を慨嘆している。

日清戦争が終わると、キリスト教に対する態度が変わりはじめ、平壌の場合、「戦争以降はとても大きな変化があった。二八名が洗礼を受け、中流階級の最も悪名高い放浪者、あまりに不道徳でだれにも相手をされなかった男たちが清く正しい生活を送りはじめたのである。教えを受けている洗礼志願者が一四〇人おり、受洗に先立つ長期修練の対象となっていた。また仮設の礼拝堂はわたしがいないあいだに拡張したものの、それでもまだ小さすぎ、多数の礼拝者が外にはみだしていた」[30]と伝えられ、ようやくキリスト教が民衆に受け入れられてきた。

興味深いことは、国王高宗もキリスト教に関心をみせ、バードは、「キリスト教伝道団に対する国王の態度はきわめて好意的で、その寛容さは本物である」[31]と記しており、米国人宣教師アンダーウッドには「高宗は一時、私に韓国のキリスト教を国教として定めたいという意向を言及した」[32]と証言している。また、ハルバルトは、国王は伊藤博文に強要され、王位を譲位された際も「高宗がキリスト教の国教化を宣教師らに懇請した」[33]と伝えている。推測の域は超えられないが、国運の終焉と王室の没落が目の前に迫ると、最後の頼りとしてキリスト教の国教化を表明したと思われる。

韓国は、第二次日韓協約により主権を奪われ、保護国になると、事態克服のために民族覚醒として近代教育の重要性が叫ばれ、教育救国運動が全国的に展開された。当時の学校教育は伝統教育の書堂（寺子屋）が主導したが、近代教育はキリスト教主義学校がわずか普及されていた。しかし、教育救国運動は大きいな影響を与え、1910年学部統計を取り上げると、官公立学校146校に対して、教育救国運動による私立学校は2,225校に達し、文化的抵抗がいかに激しかったかを物語っている。[34] 教育救国運動における首都ソウル地域は従来、讃美歌の作詞がよく作られていたが、第二次日韓協約以後は、讃美歌旋律に愛国唱歌の歌詞付けが現された。この現象について魯棟銀氏は、「当時、《愛国歌》とは培材学堂の生徒らが《韓国歌》《独立歌》、そして《進歩歌》を歌った。また、他の学校においても新しい《愛国歌》が歌われたことをみると、《愛国歌》は『国を愛するすべての歌』を示していた。このような集会には数万名が集まり、《愛国歌》を高唱した。[35] また、これらの唱歌はキリスト教の信仰告白が主流を形成しており、スコットランド民謡《オールドラングサイン》(Auld Lang Syne) や讃美歌に替歌が歌われる特徴がみられる」[36]と《愛国歌》

の生成過程とその伝播現像を分析している。要するに、魯棟銀氏の《愛国歌》論は当時、広く歌われた啓蒙思想、民族精神、排日思想などを総称する内容であり、筆者の命名した愛国唱歌、あるいは愛国唱歌教育運動とも類似する概念である。

自然に恵まれて比較的に温かい南部より、厳しい寒さに耐えられてきた北部は教育救国運動をはじめ、愛国唱歌教育運動も南部を遥かに越える活動を展開した。その事例は「光武九年（1905年）冬に平安北道楚山郡の私立普通時務学校を設立した。運営経費が少ない上、生徒も数名に過ぎないから、将来の見通しはないと思われた。しかし、昨春に本郡の有志らが学校の不振を取り上げ、運営経費を募金すると共に、教員を迎えた。役員は校長として町長の李章遠氏、副校長の李奉雨氏、評議長の成達観氏であり、［中略］日語教員の本田竹松、漢文教員の呉権翊を招聘した。生徒募集は一週も待たず、一一七名に達した。体操教員と喇叭教員も同時に採用し、すぐ練習を行った結果、生徒四十名は体操に尽力し、今回の試験に合格して二年と三年に進級した生徒は十名であり、寄付金も三〇〇円に達した」[37] と述べている。愛国唱歌教育運動は、主に北部の私立学校で盛り上がったが、その生成過程の原形は、私立普通時務学校にある。

愛国唱歌教育運動は、日本の韓国統治における重大な反日思想として日本の言論界にも報じられ「韓国には目下官公立の諸学校の他に私立学校が約三千、一校多くは三百名少なくも二三十名の学生を養成して居る。其内三分の一の一千校は外国宗教の手で設立されたのか或は其補助を受けて居るものである、是等私立学校の教師学生悉く悲憤慷慨の徒で頻に所謂愛国の精神を鼓吹し、或は国権回復の韓国独立のと血眼に成つて騒いで居る、是等の学校は詰り日本の統韓政治を覆さうとする暴徒養成の温室である、次きに揚ぐるは彼等の間に盛んに誦唱して居るものである、原文は漢文で出来て居るが若し学部委員なぞが巡視にでも行くと、誦唱をパツタリ止め何食はぬ顔して普通の教科書を講ずる、其後姿が見えなくなると、又候是等の悲憤慷慨の歌を歌ひ出しては、炎々と燃え立つ様な例の排外主義独立主義を鼓吹するのである」[38] と当時の愛国唱歌教育運動の実態を的確に報告しており、排日行為は学校教育、とりわけ唱歌教育が重要な思想と行動を支えてきたと考えられる。

学部委員が巡視する際に、生徒らが熱唱した愛国唱歌は、《精神歌》《愛国歌》《運動歌》などである。それらの歌詞を取り上げると、《精神歌》では「悲ひ哉我民族よ　四千余年の歴史国　千々孫々享け来るに　今日此境遇何故ぞ　鉄の紐にて縛されあるを　我等の議論にて解き捨てよ　独立万歳の声裡　海を沸かし山を動かせよ　小さき草も我物ならす　数畝の土も我物ならず　不法の羞辱も答へ得ず　殴打も空しく受く　一寸の虫も打たるれば　死する前一度活動す　一小罪を果しても　我身は立るに命なし…」と歌われており、《愛国歌》では「万国の主　我天の神は　世界掀立の其際に　大韓帝国小なるも　今日迄特に愛し給へり学徒々々々よ　在大韓帝国の学徒よ　勤めや勤めや勤めや　忠君愛国を勤めよや皇城都会の地より　深山幽谷に至る迄　二千万の我同胞等　相愛し相扶けば　我が皇上喜ばれん　白頭山より漢羅山に至る　三千里の江山皆我家　大韓帝国独立を　永遠に整固ならしめよ　天の神顧賜ふ　官民和合、老少同楽　日月明かに大韓を照さん　学徒や学徒青年学徒　忠義愛国のを誠を忘るゝな」と歌われた。そして《運動歌》では「大韓国万歳富強の基は全く国民を教育するに在り　社会の職責を負はんには体育の完全必要なり　清明なる天気は広き庭、太極旗の下に集り、勇敢なる精神を持て赴き、活発に走り遠に出でよ　前に立つものは暫く待て、万人中一等賞は我物なり　上帝禀賦の貴き人物にて、

何事も奮発せば目的を達すべし　勝を喜び負くるを好まざるは一国の人皆一般なり　出で行け高喊を挙げつゝ、精神を励まし出〃視よや　韓半島に名誉を挙げ、我等学徒の名声を聞かせ学徒や学徒、青年学徒、忠義の心、愛国の誠を忘るゝな」[39] と歌われたが、これらの愛国唱歌は広く普及され、民族学校及びキリスト教主義学校においては、欠かせない教材であった。

愛国唱歌教育運動は、統監府や学部から取り締りの主要対象になり、学部次官俵孫一の提出した報告書『漢城府内基督教学校状況一斑』によると、私立大東基督小学校では「本校学徒ノ携帯スル手帳ヲ検スルニ愛国歌、精神歌アリ其歌詞中『学徒ハ国ノ基礎ナレバ善ク勉メテ我ノ三千里江山ヲ回復スベキ』『人ハ一度ハ死ヌベキモノ死ハ決シテ恐ルルニ足ラズ』『国権ヲ回復シ云々』等ノ文字アリ拙キ諺文ノ筆写ニシテ且咄嗟ノ間ナルヲ以テ十分ニ閲読スルヲ得ザルシモ不良ノ歌詞ナリシハ明ナリ」「愛国歌、精神歌ニツキテハ教師ニ斯ルモノヲ学徒ニ唱ハシムル不可ナルヲ厳論シ置ケリ」[40] と記され、生徒は日本の韓国占有に対する排日思想を武力のみならず、文化として抵抗しているが、その内容は単なる意思表明ではなく、死を覚悟した真剣さが伝えられる。

私立聖義学校における愛国唱歌教育運動は、「第一学年生ノ教室ニ入ル［中略］学徒ノ手帳ヲ検スルニ其内ノ一つニ愛国歌ト極メテ拙ナル楽譜トヲ記セルアリ歌詞ハ簡単ニ諺文ヲ以テ三千里ハ江山愛スベシ云々トアルニ過ギズ［中略］又太鼓二個、ラッパ五個アリ運動会ノ際用ルモノナリト云フ」[41] と報じられ、キリスト教主義学校の愛国唱歌教育運動では、愛国唱歌だけではなく、洋楽の受容過程として楽譜が普及されたと思われる。そして愛国唱歌の手帳においては、漢字歌詞のみならず、ハングル歌詞が歌われ、愛国唱歌教育運動の普及拡大の可能性を示唆している。

韓国駐劄各道憲兵隊長会議席上における俵孫一学部次官の演説では、「極端ノ例ヲ示セバ平安南道永柔郡私立李花学校ハ其編成喇叭科、太鼓科、体操科ノ三科ヨリ成リ」[42] と伝えられ、いわゆる「愛国唱歌専門学校」の性格をみせている。同校は、近代教育を目的に設立した学校とは全く異なる教育理念を表明しており、学校教育というより、一種の軍楽学校、あるいは音楽体育学校の色彩を帯びている。

このように、愛国唱歌教育運動は、日露戦争直後から文明開化の思想が薄れる傾向をみせる反面、愛国精神と排日思想を全面に出している。キリスト教主義学校は、米国の政治的背景に頼りながら、愛国唱歌教育運動を本格的に展開し、その抵抗行為は愛国思想そのものから生み出されたものとして、愛国唱歌の真髄をみせる境地に達していた。その結果、統監府や学部は、キリスト教主義学校が最大の課題となるが、米国勢力を背景にするため、本格的な取り締りはできず、視察と報告に留まることに過ぎなかったことがよく分かる。

## おわりに

韓国における音楽教育は、キリスト教受容が重要な契機となり、その受容過程を通して、讃美歌から音楽教育へと具体化されたと考えられる。キリスト教受容は、国教たる儒教の存在を熟知しながら、生成されたものであり、韓国宗教界の変動を呼び起こした現象である。

洋楽を中心に音楽教育が行われたことには、キリスト教主義学校の発展が決定的に貢献したと言える。キリスト教主義学校から高唱された愛国唱歌教育運動は、その本拠地が北部（現在の北朝鮮）であり、組織、内容、活動などで独特な性格を示し、世界音楽教育史

からみても特記すべき活動であった。

愛国唱歌教育運動は、その展開規模と内容をみる限り、絶句するほどの文化的抵抗であるが、音楽芸術の分野からみると、北部と南部（現在の韓国）に良質の落差が鮮明に現われる。北部は、排日思想、民族精神に燃え、歌唱を中心とする愛国唱歌が生成されたが、音楽芸術の側面から分析すると、必ずしも高い水準とは言えない。その反面、南部は開国直後から入国した宣教師らが設立したキリスト教主義学校の貢献が重要な役割をした。変革期とはいえ、音楽及び音楽教育が充実に行われた。それは、統監府と学部も日本の音楽教育を凌ぐ学校が存在していると報告したことをみてもよくわかる。

愛国唱歌教育運動の考究は、民族精神や排日思想からみるべきか、音楽芸術からみるべきかは、その考察の視点から決めることになる。現在のところ、両方の要素を十分に揃えている領域はキリスト教主義学校である。しかし、キリスト教主義学校の愛国唱歌教育運動が独自に展開されたか、といえば一言ではいえない。この課題は現在、韓国近代音楽教育史研究の中心的領域区分である民族系、宣教系、日本系の改編、あるいは再編が必要になる。すなわち、これら三領域は、基本的に教育行政及び排日運動が生み出した結果であるが、民族系と宣教系の性格の明確な区別は難しい。さらに、宣教系はキリスト教主義学校を標榜しながら、民族系の愛国唱歌教育運動を擁護していた。ところが、最近、筆者の史料分析によると、宣教師は統監府及び日本系とも内密関係を結んでおり、必要な部分は協力していた。これらの内容は、別度の原稿を通して、その内実を明らかにすると共に、愛国唱歌教育運動の性格と構造を再構築したい。

## 注

1）本稿の対象する時代は、韓国近代であるが、開国以来は朝鮮と呼ばれた。日清戦争以後、日本が朝鮮内政に深く関わりをもつと、それに対する反動として1897年、国号を大韓帝国へと改名した。そして日本植民地時代は朝鮮と呼ばれたが、解放後は大韓民国へと改名された。本稿では、国号を主に韓国と略式呼称するが、本来、韓国という国名は存在していない。

2）『東京日日新聞』1881年11月21日。

3）同上書1882年１月28日。

4）同上書1882年９月30日。

5）「朝鮮の少年『君が代』唱ふ」『音楽雑誌』第39号、1893年12月１日、17頁。

6）「熾に軍歌を歌はしめよ」『教育時論』第336号、1894年８月15日。

7）「朝鮮人日本軍歌を学ふ」『音楽雑誌』第54号、1895年10月１日、20頁。

8）文部視学官野尻精一「韓国教育談」続『教育界』第４巻第10号、1905年８月3日、88頁。

9）『独立新聞』第２巻第80号、1897年７月8日。

10）吉富功修「音楽教育の思想」『重要用語300の基礎知識８巻－音楽科重要用語300の基礎知識』明治図書、2001年、16頁。

11）『官報』第3698号、1907年２月25日。

12）『皇城新聞』1908年６月18日。

13）『皇城新聞』1907年６月22日。『大韓毎日申報』1907年６月25日。

14）「協議事項及協議ノ概要」、学部『第二回官公立普通学校教監会議要録』1908年７月、77～82頁。

15) 兪吉濬（1856～1914年）は、ソウル出身として旧韓末の政治家、開化運動家である。1881年紳士遊覧団の一行として渡日し、慶応義塾で福澤諭吉に教育を受けた。全権大使閔泳翊と渡米し、ワシントン大学、ボストン大学を卒業した後、欧米を視察した先覚者である。帰国後、開化党として疑われ、拘束された際に啓蒙書『西遊見聞』を執筆した。甲午改革（1894年）の際、金弘集内閣の内部大臣となり、俄館播遷の際、日本へ亡命した。1907年に帰国し、興士団と漢城府民会を通して民衆啓蒙運動に尽力した。日韓併合後、日本政府から授与した男爵の爵位を断った。
16) 世界教育史研究会編、梅根悟監修『朝鮮教育史』講談社、1977年、224頁。
17)『独立新聞』1896年８月4日。
18)『独立新聞』1896年９月12日。
19)『独立新聞』1897年６月22日。
20) 俄館播遷とは、朝鮮王朝末の1896年２月11日から約１年間に渡り、国王高宗と皇太子がロシア公使館へ移して過ごした事件である。
21)『独立新聞』1897年８月17日。
22)『皇城新聞』1898年９月20日。
23)『独立新聞』1897年４月29日。
24)『独立新聞』1897年８月7日。
25)『大韓毎日申報』1906年11月16日。
26)『大韓毎日申報』1906年11月22日。
27)『皇城新聞』1907年４月23日。
28) イザベラ・バード『韓国紀行』講談社、1998年、444頁。
29) 同上書447頁。
30) 同上書444頁。
31) 同上書336頁。
32) L.H.Underwood, Underwood of korea, New York, Fleming H.Revell, 1918, p.204
33) H.B.Hulber, Japanse and Missionaries in korea, M.R.W., March, 1908. p.208
34) 朴成泰『韓国近代学校における民族主義教員養成の成立過程』風間書房、1996年、436頁。
35)『独立新聞』1898年８月24日。
36) 魯棟銀『韓国近代音楽史〈１〉』ハンキル社、530頁。
37)『皇城新聞』1908年７月2日。
38)『教育時論』第893号、1910年２月5日、43頁。
39) 同上書43～44頁。
40) 俵孫一『漢城府内基督教学校状況一斑』1910年６月、28～32頁。
41) 同上書37～38頁。
42) 俵孫一『明治四十三年七月十三日韓国駐劄各道憲兵隊長（警務部長）会議席上俵学部次官演説要領』1910年７月13日、32頁。